

---

# 歪んだ日常

妄想Kei

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

歪んだ日常

### 【著者名】

妄想Keri

N3459Y

### 【作者名】

【あらすじ】

日常にはいつもどこか違和感がある。  
幻想的な、空想的な。  
でもそれらはけして掘めるものじゃなかつた。  
日常は酷く歪んでいる。

## 歪んだ日

目が覚める。

俺は寝ていたのだろうか？それすらわからない。しかし目が覚めた、と自覚しているからには、俺は眠っていたに違いない。そうだ。きっとそうだ。

とりあえずテレビをつけようと、俺はリモコンを手に取り電源ボタンを押す。

テレビに映ったものは砂嵐。ザーヴィーと耳障りな音だけが部屋に響いていく。

俺はそんな「無」を流し続けるテレビの画面をじっと見つめていた。

しばらくすると、ニュースらしき番組が映し出された。右上に時間が表示されている。

「26：68」

これは果たして時間なのだろうか。時間にすれば昨日から見た明日の3時8分。最近のテレビはまともに時間さえも教えてくれないのか。

くだらない。全てくだらない。顔でも洗いに行こう。

洗面所に行くと俺よりも大きな、巨大な熊のぬいぐるみが尖った歯を「ゴシゴシ磨いていた。熊のぬいぐるみは俺の方を向き、無表情に

三。

「今日はクッキーを焼く。たくさん食べるから歯をたくさん磨くの。そうしたらたくさんクッキーを食べられるの。そうしたらたくさん幸せになれるの。」

そう言ったかと思つと、熊のぬいぐるみは全力で洗面所から走り去つて行つた。

なんだつたんだ。俺は氣にも止めず水で顔を洗う。ふと鏡を見ると、さつきの熊のぬいぐるみが物陰から俺のことを見つめていた。そのまま鏡越しに見ていると、何かおかしなものに吸い込まれてしまいそうになる。

それは重たく

酷く遼んだ日常だった。

## 雨の日

雨が降っている。

ただ冷たく、落ちて、落ちて。

雨はどこから來るのだろう。多分下からではない。下でなになら上だらう。上からまつまつとまつて來るんだ。

右からまつまつ、左からまつまつ、下からまつまつ、そんなの嘘だ。優しいカエルは嘘をついた。それは、雨が上からやつてくるからだ。優しいカエルはそれが嫌だつたんだらう。まだ幼い「僕」にはわからなくて良かつたんだ。だから優しいカエルは優しい。今の「俺」には愛おしい存在。

雨の口は外に出まつ。ボロボロのベール傘なんかさして、ジャブジャブとまではいかずとも、バシャバシャと、まつまつと。ああ、雨つて色々な音がする。

まつまつ

ジャブジャブ  
バシャバシャ  
ザーザー  
びしゃびしゃ

音が俺を包む。昔の「僕」なりとつて連れ去られてるだらう。音の、見えない見えない深みへと。

さあ外に出まつ。雨はまだ降つてこゐる。ベール傘が俺を包む。濡

れないでね。ヌレナイデネ。ああ気持ち悪い。

ひょっこりとカタツムリが姿を現す。どこから? 濡った木から生える枝の先の葉っぱの影から。

「ここにちはあなた、欲情欲情。私はカタツムリ。欲情カタツムリ」このカタツムリはどうも欲情しているらしい。俺に?いや、雨の日に。

「ここは学校。カタツムリ学校。雨が降っているから中止。全て中止。ああ! 欲情!」

カタツムリが葉っぱから落ちた。

べちゃつ

「苦しい私。そんな私はカタツムリ。欲情カタツムリ」

笑いが止まらなかつた。俺にはその光景がそれほどコニークなものに見えた。ただ、おかしくて。

「私は消える。なぜなら今日は雨の日。気をつけて。次はあなたが欲情」

そう言うとカタツムリはスッと消えた。カタツムリは光になつたのだろう。風と共に、光は流されていく。今日が雨の日でなければ、こんな悲しい気持ちにならなかつただろう。こんな光景を見て、優しいカエルならきっとこう言つ。

「窓からやつてく。光に刺さつ、音を連れ、記憶の中に生きよつとある。君の今とこゝ存在、僕はまだわからなくていい。」

そつや、「僕」はわからなくて良かったんだ。雨がビリからりひざむかなんじ。

歩いていくと、公園が見えた。遊戯道具は雨に濡れ、休息の場であるベンチは酷く濡れていて座れそうにない。ブランコを見ると、1人の学生らしき少年がいた。濡れたブランコに座り、ただゆらゆらと揺れている。制服を着た見かけからして高校生か中学生。ただ、そこには一つの違和感がある。

首がおかしな方向に曲がっている。捻れ曲がつてると言えばいいのだろうが、曲がった首の先にある頭は姿勢は普通なのに、どこを見ているのかまったく検討がつかない。あるいは空を、地面を

俺を見てこのだらう。

首のおかしな学生に俺は近づき声をかける。

「やあ、君の首はおかしいね。だつて、変な方向に曲がつてゐるんだもの。」

首のおかしな学生は、俺の方を見よつともせず、独り言のように呟いた。

「僕は独りで雨に濡れてる。おかしいおかしい、首がおかしい、首はおかしい。ぐださい、顔、田、ぐださい、鼻、耳、聞こえる、音、君は独り?独り?雨の田に、こんな田にねえねえねえ…」

黙つていて欲しかつた。俺は学生を後ろから突き飛ばした。突き飛ばされた学生は、力なくブランコから落つ、バシャンといつ水のはじける音と共に地面に倒れた。

「ありがとうねえ」

学生はおかしな首を俺の方に向けてそう言つた。

「泣いているのかい？」

俺は倒れながら俺の方を見つめる学生に聞いてみた。

「悲しいよ、雨は悲しいよ、独りは嫌だよねえ。でも泣いてないよ、悲しいけどねえ。首がおかしいんだ、痛いんだねえ、痛いんだねえ」

そうこうと学生はスッと消えた。彼もまた光になってしまったのだろうか？ああ、こんな気分になつてしまつのも今日が雨の日だからに違ひない。

疲れた。俺は濡れたベンチに腰掛ける。冷たい。濡れたズボンが肌に張りつく。

いつから俺は傘を無くしたんだろう。持っていたはずのビニール傘は面影もなく、俺の体はこんなにも濡れている。今日はせっぱり雨の日だ。

空を見上げてみると、やつぱり雨は上から降つてゐる。でも、さつきの首のおかしな学生からしたら、きっと空は上なんかじゃない。右かあるいは左か、右から雨が降つてくるんだ。頬を濡らすんだ。

なんてね。

優しいカエルなら今日どこで田をなんて言ひだらうか？

「雨の田」

そう言つのだらうか？

家に帰る。そう思い、ベンチから立ち上がった時、草影からひよ  
つじとカエルが現れた。

そう、優しいカエルだ。優しいカエルはやつぱり優しい。ゲコゲコ  
ゲコゲコ。

優しいカエルは物悲しそうな顔で言つ。

「傘は最初から持つていなかつたよ。ずっと見ていた。色々もの  
を見たようだね。色々な音を聞いたみたいだね。でもね、それは全  
て違うんだ。君はもう僕じゃない。見てごらん僕を。そして君とい  
う存在を。君はね、濡れてなんかいないんだよ。雨なんか降つてい  
ないんだよ。空はこんなにも透き通つている。傘なんかいらないん  
だよ。」

空を見てみる。違つ。きっと違つ。空は曇が覆つている。見るから  
に億劫そうな曇が覆つている。そして上からくるもの。その存在は  
雨というんだ。

「違う。全部違う。僕が優しいのも。雨が上からくるのも。違うん  
だよ。見てじりじり、この音を。君の田で見るんだ。そひ、この音だ  
よ

聞こえる。遠くから音が、そうだ。こんな音をきっと歌聲といふんだ。でも誰が歌っているんだろう。これは、素敵な音だ。そうに違いない。

「見えるね。聞こえるね。音は時に人の心に語りかけてくる。そして、それに応えるとき、君は音を見ることができるんだ。どうだい、こんな日もなかなかいいものだろう」

そうだ、優しいカエルはやっぱり優しい。

今日が「雨の日」であると

そう歌声が俺に語りかけている気がした。

そんな日だった。

## 壁の田

壁がある。そう「それ」はそこにある。「それ」は何か、そう「壁」だ。壁は何のためにあるのか。壁は分かっているだろうか。自分がそこに存在する意味を。もしもそれが分からなかつたら、そこに「ある」意味なんてないのかもしけない。そんな存在。

ノックをしてみる。

コンコン

「入ってます」

声が返ってきた。そこには一体何があるところなのだろ。

「あなたは誰ですか?」

コンコン

「壁です」

やつぱり返ってくる。壁はどうしてそこにあるのだろうか。なんのためにそこにあるのか。

「中ですか、外ですか

コンコン

「わかりません

少し意地悪だつたかもしれない。ならこれならどうだか。

「表ですか、裏ですか」

コンコン

「裏です」

そう、壁は「裏」だつた。これ以上聞いたら壁はどうなつてしまつただろうか。おかしくて笑つてしまつただろうか。そんなんじゃいけない。きっといけない。

俺は助つ人を連れてきた。長生きし過ぎた黒猫。彼は凄い。きっと彼ならこんな壁を救うことができるんだ。

長生きし過ぎた黒猫は言つ。

「私には壁がそこにある、といつことがわからない。理解が出来ないのだ。私の目が悪いわけじゃない。ただ、これがある理由がわからぬのだ。」

俺には長生きし過ぎた黒猫の言つていることが理解できない。やっぱり、長生きし過ぎた黒猫は長生きし過ぎたんだと思つ。

長生きし過ぎた黒猫は壁をノックする。

「入つてます

コンコン

やつぱりそれは壁なんだ。俺は再確認する。そつ、これは壁なんだ。  
長生きし過ぎた黒猫は驚いていた。そつ、これが「壁」であるところ  
の事実。

長生きし過ぎた黒猫には全てが分かつたようだつた。それが「壁」  
であることやえ分かれば、理解できなじことはない。なぜならそれは  
は「壁」だから。

やつぱり長生きし過ぎた黒猫は長生きし過ぎたんだとゆづ。

長生きし過ぎた黒猫は俺に教えてくれた。

「壁があるところ」とは、壁はそこにある。そこにある。これは間  
違いなく壁だ。だから、もう一度聞いてみるとこー

「表ですか裏ですか」

「表でーす」

「表でーす」

そつ言つと壁は始めからないで何もなかつたかのよつて消えてし  
まつた。表と裏は同時に存在することができなかつたんだ。俺は壁  
を救う」とが出来たのだろうか。

「大丈夫だ。心配することはない。なんならあそこを見てみると  
い。あれは一体なんだろづな」

長生きし過ぎた黒猫が指差す方を見てみる。あれは、そう。

コンコン

「入つてます」

そんな日だった。

## 夜の田

夜になつたら早く帰れ。影を踏まれば帰れなくなる。やつ嘘つきフクロウは言つていた。

嘘つきフクロウは嘘つきだ。彼の言葉に意味があること少ない。もつ嘘は暗くなる。これから「夜」になる。一日はもう終わりにさしかかっているが、夜はこれから始まるのだ。

空はすっかり暗くなつた。暗くなると轟んで街へ出る者達がいる。彼らに怖いものなんてあるはずがない。彼らは恐怖そのものなんだ。

「影つぶーんだ」

嬉しそうな声に振り返る。そこにはまるで子供のよひしゃぎながら、俺の影の上で奇声をあげるペロロがいた。

「ひやつ踏んだ踏んだ踏んだ、ふつう影が薄くなつてく。君の影はどうあるの? つゆ」

笑いをこらえているのか、所々に笑い声が混ざりそうになつていて。そう言つとペロロはおかしな足取りで走り去つていった。

嘘つきフクロウは言つていた、影を踏まれたら、踏んだ者の影を踏みかえそう。でないと影は盗られてしまう。

俺はペロロを追つてこつた。でも嘘つきフクロウは本当に嘘つきだ。

その辺にいる人に聞いてみる。

「もしもし、ピエロがどこへ行つたか知りませんか？」

「知らないよ。知らないよ。僕にはどうしようもないよ。もう、どうしようもないよ」

そういうと男はおんおんと泣き始めてしまつた。そうか、この男も夜の者なんだ。

「ありがと」

俺はそう言つて、おもいきり男の顔を殴つてやつた。これでいい。夜の者は信用できない。

「痛いよ。痛いよ。もうどうしようもないよ。もうないよ」

男はさらに泣き始める。すると突然地面から女が生えてきた。その女は男を慰めるかのように肩に手を置く。

「大丈夫。あなたは大丈夫。だってあなたは大丈夫なんだもの。大丈夫だからあなたは大丈夫なの。そう、大丈夫」

男は顔をあげ、嬉しそうな顔で女を見上げる。

「僕にもうどうしようもないんだ。もうないんだ」

「大丈夫あなたは大丈夫なの。大丈夫だから、あなたは大丈夫なの」

俺の精神は既に崩壊寸前だった。大丈夫？ 大丈夫って何だ？ だいじ

ようぶ？だいじょーぶ？

すると、女が今度は俺の方を向いて。

「あなたも大丈夫。きっと大丈夫だから、あなたは大丈夫なの。大丈夫なのは大丈夫だから。大丈夫だから大丈夫なの」

俺には既にこの女がなんと言っているのかがわからなかつた。立ち去ろう。ピエロを探さないと。

時間は深夜27時20分。時間がない、早く探さないと。

嘘つきフクロウは言つていた。影のない者は朝を迎えることができないよ。永遠に夜を、暗闇を、影を探すんだよ。

怖い。怖い。怖い。怖い。影が欲しい。怖い。影が欲しい。暗いのは嫌だ。怖い。怖い。

夢中で走つていると、見覚えのある姿が見える。あれはそう、俺の影を踏んだピエロだ。俺はピエロの肩を思いきりつかむ。

「捕まえた」

そう言つたのは俺ではない。ピエロだ。ピエロがそう俺に言つた。俺に背中を向けながらそう言つた。俺は捕まつてしまつたのだろうか。逃げようのない暗闇に、夜という恐怖心に。

「もう、遅い、遅い、朝になるね。朝は嫌だね。朝は明るいんだ。きっと明るいんだ。明るいのは嫌だね。影が見えてしまうもの。暗闇ならいいのに。影は暗闇なら見えないので。僕は暗闇でしか生き

「こなにんだよ

この人口は夜の者だ。夜の者は夜にしか生きられない。なぜなら  
彼ら自身が影だからだ。影はいつも自然なものでなければならぬ。  
そつ、少なくとも見えている間は。

「影返す。やみなり。昨日とやみなり。今日とやみなり。ひ  
や  
」

そう言つと人口は消えた。彼は俺の影だったのだろうか？

嘘つきフクロウは言つてはいた、夜になつたら早く帰つ。影を踏ま  
れて、永遠の闇の中。夜の中。

彼の言葉で、意味のあることではない。

そんな日だった。

## 死にたい日

消えたい 消えたい 消えたい 消えたい 消えたい 消えたい

# 死ぬの恐い？

死にたくない？

でも死にたい消えたい

失敗作

俺は失敗作

消えたい死にたい消えたい

うを飛ふけど捕まえられない死にたい消えたい死にたい消えたい

へもも走る飛ぶ消えた二さき死にたし

ハ、物をかき散らして、お出でで、お出でで、お出でで、飛ぶ飛んだ

消えた二色毛に失敗作

消えたつさぎ飛ふけど捕まえられない

死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい死に  
たい死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい  
死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい  
死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3459y/>

---

歪んだ日常

2011年11月19日23時00分発行